『語学教育研究論叢』第 38 号

曲がり角の数え方と事態把握
―日中対照の観点から―

上田　裕

How to Count Corners and Grasp the Situation:
A Comparative Japanese-Chinese View

UEDA Hiroshi

摘要

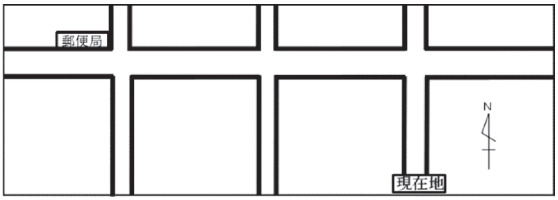
本文重点考察日汉母语者在空间认知上的异同点及其原因。对日汉母语者的问卷调查显示，与日语母语者相比，汉语母语者在地图上倾向于多数一个拐角。以往的研究指出，说话人对事态的识解方式可以分为“主观识解”与“客观识解”两个类型。日语是倾向于主观识解的语言，而汉语则倾向于客观识解。本文认为这种差异也反映在日汉母语者对拐角的计数上。进行主观识解的说话人视野狭窄，第一处拐角没有放进视野里；进行客观识解的说话人视野开阔，第一处拐角就放进视野开始计数。因此，日汉母语者在空间认知上的差异，能由日汉语识解方式的倾向性差异给予解释。

キーワード：事態把握　主観的把握　客観的把握　視点　地図

1. はじめに

地図を用いて道順を説明する際、言語によって説明の仕方が異なる場合がある。図 1 を用いて郵便局までの道順を説明する場面では、たとえば(1)のような説明文が用いられる。

図 1



⑴我们现在在这个“现在位置”。沿着眼前这条路直走，到第一个拐角处左拐。在第二个拐角处就是邮局了。（私たちは今この「現在地」にいます。目の前の道に沿ってまっすぐ行き、最初の角に着いたら左に曲がります。2 つ目の曲がり角にあるのが郵便局です。）

下線部の“第二个拐角处（2 つ目の曲がり角）”という箇所に注目されたい。日本語母語話者にとって、現在地から北に向かって最初の角を左に曲がった「2 つ目」の角に郵便局があると説明するのは、まったくあたりまえのことのように思われる。しかし、興味深いことに、中国語母語話者の中には、下線部を“第三个拐角处（3 つ目の曲がり角）”とする人が少なからず存在するのである。

詳細なデータは第 2 節で提示するが、日本語と中国語では、地図上における曲がり角の数え方に、明らかな傾向差が存在する。先行研究では、両言語の間にこうした差異が存在することは指摘されていない。本稿は、日本語と中国語で、曲がり角の数え方に傾向差が存在する理由およびそれと関連する問題について、事態把握の観点から考察をおこなう。

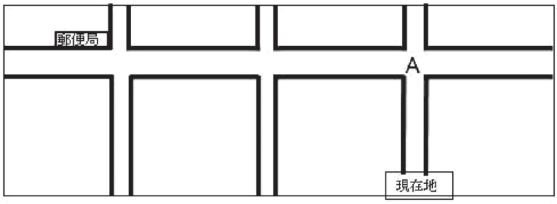
2. アンケート調査

2.1　調査の内容と目的

日本語と中国語における曲がり角の数え方を調査するために、両言語の母語話者それぞれ 94 人を対象としたアンケート調査をおこなった。調査期間は、2018 年 1 月から 8 月までである。日本語母語話者は、男性 35 人、女性 59 人であり、年齢は 10 代が 51 人、20 代が 21 人、30 代が 18 人、40 代と 50 代が各 2 人である。中国語母語話者は、男性 15 人、女性 79 人であり、年齢は 10 代が 20 人、20 代が 63 人、30 代が 6 人、40 代と 60 代が各 1 人、50 代が 3 人である。

以下に、日本語母語話者用のアンケート用紙を掲載する。中国語母語話者用のアンケート用紙は後掲する。

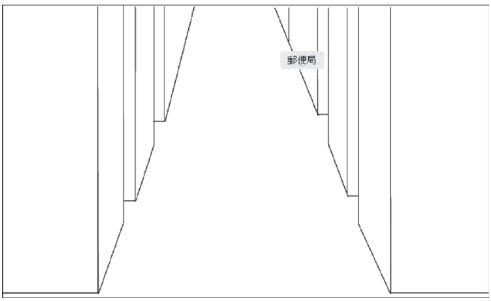
Ⅰ．道を尋ねられたあなたは、下の地図を見せて、郵便局の場所を説明しています。［説明文 1］の（　）内に当てはまる数字を書いてください。



［説明文 1］

「私たちは、今、「現在地」にいます。目の前の道をまっすぐ行って、最初の角を左に曲がってください。（　）つ目の角に郵便局があります。」

Ⅱ．あなたは、今、上記の地図の A 地点で郵便局がある方向を向いており、以下のような風景が見えています。この状況で、郵便局の場所を説明する［説明文 2］の（　）内に当てはまる数字を書いてください。



［説明文 2］

「ほら、あの（　）つ目の角にある建物が郵便局です。」

上に示したとおり、アンケート用紙には 2 つの設問を記載した。設問 1 は、地図上における曲がり角の数え方を調べるためのものである。設問 2 は、話し手が A 地点に立脚した状況における曲がり角の数え方を調べるためのものである。設問 2 を作成したのは、地図を見る場合と A 地点に立脚する場合とで、曲がり角の数え方が異なるか否かを調べるためである。

2.2　設問 1 の回答結果

設問 1 の回答結果を以下に示す。割合の数値は、小数点以下 2 桁目を四捨五入したものである。

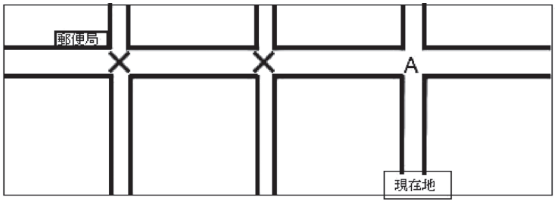
表 1　設問 1 の回答結果

	日本語母語話者	中国語母語話者
2 つ目	88 人（93.6%）	61 人（64.9%）
3 つ目	1 人（1.1%）	33 人（35.1%）
4 つ目	5 人（5.3%）	0 人（0%）

特に注目したいのは「3 つ目」と回答した人数である。「3 つ目」と回答した日本語母語話者がわずか 1 人であるのに対して、中国語母語話者は 33 人も存在する。中国語母語話者の実に 3 分の 1 以上が「3 つ目」と回答しているという結果は、単なる個人差として処理できるものではない。

「2 つ目」と回答した人は、図 2 の×印をつけた曲がり角を数えたと考えられる[1)]。「3 つ目」と回答した人は、×印をつけた曲がり角に加えて、A 地点もカウントしたと考えられる[2)]。

図 2



以上で見たデータから、次のような問いが立てられる。

［問い 1］　設問 1 で「3 つ目」と回答した日本語母語話者はわずか 1 人である。一方、中国語母語話者は、3 分の 1 以上（33 人）が「3 つ目」と回答している。日本語母語話者と中国語母語話者で、曲がり角の数え方にこのような傾向差が見られるのはなぜか。

2.3　設問 2 の回答結果

設問 2 の回答結果を以下に示す。割合の数値は、小数点以下 2 桁目を四捨五入したものである。

表 2　設問 2 の回答結果

	日本語母語話者[3)]	中国語母語話者
2 つ目	66 人（70.2%）	80 人（85.1%）
3 つ目	24 人（25.5%）	14 人（14.9%）
4 つ目	1 人（1.1%）	0 人（0%）
5 つ目	3 人（3.2%）	0 人（0%）

特に注目したいのは、「3 つ目」と回答した中国語母語話者が、設問 1 に比べて少ない点である。「3 つ目」と回答した中国語母語話者は、設問 1 では 33 人、設問 2 では 14 人と、人数にして 2 倍以上の差がある。

以上で見たデータから、次のような問いが立てられる。

［問い 2］「3 つ目」と回答した中国語母語話者が、設問 1 よりも設問 2 で少ないのはなぜか。

以上で立てた 2 つの問いに対して、第 4 節で、事態把握の観点から考察をおこなう。次の第 3 節では、事態把握の 2 つの類型について、先行研究を概観する。

3. 主観的把握と客観的把握

話し手による事態把握の仕方には、主観的把握と客観的把握という 2 つの類型があるとされる。池上 2008：3 は、これらを次のように規定している。

主観的把握：話者が言語化しようとする事態の中に身を置き、当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者はあたかもそこに臨場する当事者であるかのように、体験的に事態把握をする。

客観的把握：話者が言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者、ないし観察者として客観的に事態把握をする場合。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者はあたかもその事態の外に身を置いている傍観者、ないし観察者であるかのように、客観的に事態把握をする。

これまでの研究で、日本語は主観的把握を好み、中国語は客観的把握を好むことが明らかにされている。特に、日本語においては、主観性への著しいこだわりという認知的な原則が底流として強く働いているとされ（池上 1999：93）、主観的把握が相対的に広い範囲で許容されることが知られている（池上 2000：278）。中国語において客観的把握が優勢であることを明らかにした研究には、守屋・徐 2012、佐々木 2013 などがある。李奇楠 2016 は、日本語が中国語よりも主観的な認知スタイルを好むことを指摘している。

両言語で好まれる事態のとらえ方の違いについては、木村 1996：228-229 により、

パースペクティヴという観点からも説明されている。日本語は、話し手にとっての現場に立脚した視点で対象をとらえる「現場立脚当事者指向」のパースペクティヴを好むのに対して、中国語は、現在ないし現場から遊離し、独立した視点から事態を俯瞰あるいは傍観する「傍観報告者指向」のパースペクティヴを好むとされる。この2つのパースペクティヴは、木村 2014：103 で、それぞれ「当事者現場立脚型の視点」、「傍観者俯瞰型の視点」と表現されているが、前者は主観的把握に、後者は客観的把握に近いと考えられる。

日本語と中国語で好まれる視点の取り方の違いは、両言語で用いられる言語表現の違いにも反映される。木村 2014 によれば、⑵の状況において、日本語では〈継続〉を表すテイル形が用いられるが、中国語では〈変化〉が〈すでに実現済み〉であることを意味する文末助詞“了”が用いられる。

⑵（いつからか降りだし、いまもなお降りしきる牡丹雪を見て）

a. 雪降ってる。

b. 下雪了。　（木村 2014：111 を参照）

同一の客観的事実に対して、両言語で異なる表現形式が用いられるのは、日本語では眼前の降雪を〈運動の継続〉ととらえるのに対し、中国語ではそれを〈変化の既存〉ととらえるためであるという。日本語話者は、現場に立脚する当事者の視点から眼前の状況の中に身を置き、継続という感覚を体感的にとらえているとされる。一方、中国語話者は、傍観者のごとき俯瞰的な視点から降雪以前の状況をも視野に入れ、それとの対比において降雪という眼前の状況をとらえているとされる。(2a) のような当事者現場立脚型視点に基づく話し手は、1つの事態（降雨）の中に身を置き、近視眼的、局所的な視野から事態をとらえているのに対し、(2b) のような傍観者俯瞰型視点に基づく話し手は、異なる2つの事態（非降雨と降雨）を丸ごと把握する俯瞰的、巨視的な視野から事態をとらえている（木村 2014：110, 112）。

こうした視点の取り方の違いは、空間認識の違いとして、日中両国における停留所や駅の命名方法にも表れているとされる。日本では、(3a) のような「～前」という停留所名、駅名が多く見られるが、中国語では“～前（边）”が停留所名、駅名として用いられることはなく、(3c) のような命名がなされるという。

⑶　a.　東大赤門前、中央図書館前

b. # 国家图书馆前（边）、人民大学前（边）

c.　国家图书馆、人民大学　（木村 2014：110 を参照）

「東大赤門前」のような名づけは、バスを待つ利用者やバスから降り立つ現場における局所的な視野に動機づけられているとされる。一方、大学キャンパスの外にあるバス停を“人民大学”と呼ぶ名づけは、空間を大きな括りでとらえようとする巨視的、俯瞰的な視野に動機づけられているとされる。

以上で見たように、日本語では当事者現場立脚型視点および主観的把握が、中国語では傍観者俯瞰型視点および客観的把握が優勢であり、そうした違いが両言語における言語表現や空間認識の差異として表れていることが指摘されている。

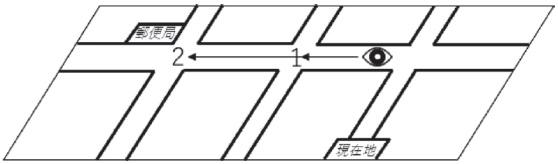
4. 曲がり角の数え方に反映される事態把握

まず、先に見た［問い 1］について考えてみたい。第 2 節で述べたように、「3 つ目」と回答した人と「2 つ目」と回答した人の違いは、A 地点を含めて数えるか否かという点にある。

「2 つ目」と回答した人は、［説明文 1］の「目の前の道をまっすぐ行って、最初の角を左に曲がってください」（以下、※）という文を発話した時点において、事態把握レベルで曲がり角が 2 つしか視野に入っていないと考えられる。曲がり角が 2 つしか視野に入らないとらえ方とは、※の文を発話した時点で、自身があたかも地図上の A 地点のやや郵便局側に立脚しているかのようなとらえ方である。その地点からは、曲がり角が 2 つしか見えないため、「2 つ目」と回答したと考えられる。

このような、あたかも地図の中に立脚するようなとらえ方は、当事者現場立脚型視点、言い換えれば、主観的把握に基づいた把握である。話し手は、実際には地図の外にいるが、自己投入（self projection）という認知的操作により、地図の中に臨場する者として事態を把握するのである。自己投入をおこない、話し手が事態の内へ身を移すと、事態の外に話し手の痕跡は残らず、事態の中に身を置いた話し手がそのまま認知の主体としてふるまう（池上 2009：69）。図 3 は、※の文を発話した時点における主観的把握の様相を示したものである。

図 3　主観的把握

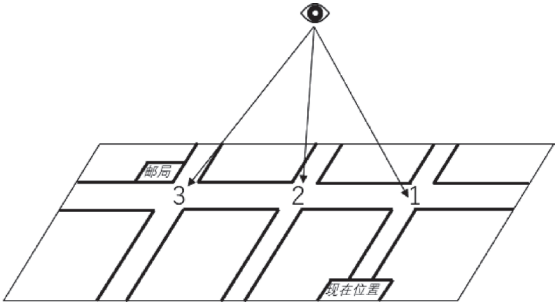


木村 2014：104 の表現を借りるなら、「2 つ目」と回答した人は、説明をしている間、聞き手に寄り添い、あるいは同化し、ナビゲーターよろしく道順に沿って自らも当事者としてバーチャルに現場を歩いているのである。

「3 つ目」と回答した人は、事態把握レベルで A 地点が視野に入っているため、それをカウントしたと考えられる。A 地点が視野に入るとらえ方とは、図 4 のような、地図を上から見下ろすような把握である。これは、言語化しようとする事態の外に身を置き、傍観者として俯瞰的な視野から事態をとらえる傍観者俯瞰型視点、言い換え

れば、客観的把握に基づいたとらえ方である。木村 2014：112 が指摘するように、傍観者俯瞰型視点に基づくとらえ方は、当事者現場立脚型視点に基づくとらえ方よりも視野が広く巨視的である。図 4 は、客観的把握の様相を示したものである。

図 4　客観的把握



以上で見たように、「2 つ目」と回答した人は、事態把握レベルで曲がり角が 2 つしか視野に入っていなかったと考えられる。一方、「3 つ目」と回答した人は、事態把握レベルで曲がり角が 3 つ視野に入っていたと考えられる。こうした違いは、話し手がとる視野の広さの違い、さらに言えば、話し手が基づく事態把握の違いに起因するものと考えられる。設問 1 で「3 つ目」と数えた日本語母語話者がわずか 1 人であるのに対し、中国語母語話者が 33 人も存在するという事実は、中国語母語話者が日本語母語話者よりも客観的把握を好むことの反映であると考えられる。

［問い 1］に対する答えは、次のようにまとめられる。

［答え 1］　日本語母語話者の 9 割以上が地図上で A 地点をカウントしないのは、事態把握レベルで A 地点がきわめて視野に入りにくいためである。これは、日本語母語話者が地図の中に立脚する狭い視野から事態をとらえる傾向、言い換えれば、主観的把握に基づく傾向が強いことに起因する。地図上で A 地点をカウントする中国語母語話者が 3 分の 1 以上も存在するのは、事態把握レベルで A 地点が比較的視野に入りやすいためである。これは、中国語母語話者が俯瞰的な広い視野から地図を眺めるように事態をとらえる傾向、言い換えれば、客観的把握をする傾向があることに起因する。中国語母語話者には、A 地点をカウントすることにより、日本語母語話者よりも曲がり角を 1 つ多く数える人が少なからず存在する。日本語母語話者と中国語母語話者で、曲がり角の数え方にこのような傾向差が見られるのは、両言語で好まれる事態把握の類型が異なるためである。

ここで再度、表 1 をご覧いただきたい。表 1 に示したように、設問 1 の中国語母語話者に対する調査で、「2 つ目」と回答した人（61 人）は「3 つ目」と回答した人（33 人）の 2 倍近く存在する。中国語母語話者は客観的把握を好むとされるにもかかわらず、主観的把握に基づいて「2 つ目」と回答する人の方が多いのはなぜだろうか。

木村 2014：104 は、人に道を教える状況において、道順をたどる行為は、現場立脚の視点の設定を促す有力な動機となり、ナビゲーションという行為が話し手の身体感覚を活性化させると述べている。この指摘に基づけば、地図を見せながら道順を説明する状況において、話し手は当事者現場立脚型視点を取りやすくなる、言い換えれば、主観的把握をしやすくなると考えられる。傍観者俯瞰型視点および客観的把握を好む中国語母語話者であっても、道順を説明する際には、当事者現場立脚型視点を取りやすく、言い換えれば、主観的把握をしやすくなるため、設問 1 で「2 つ目」と回答した人（61 人）が「3 つ目」と回答した人（33 人）よりも多く存在したと考えられる。

このことは、次のデータによって裏づけることができる。設問 1 で「3 つ目」と回答した中国語母語話者 33 人の回答状況を調べたところ、設問 2 でも「3 つ目」と回答した人はわずか 4 人であり、「2 つ目」と回答した人は 29 人であった。このことは、設問 1 で視野に入った A 地点をカウントして「3 つ目」と回答した中国語母語話者の大半が、設問 2 ではそれを視野に入れず、カウントしなかったことを示している。その理由は、設問 2 の図には、A 地点に立脚した際に見える風景が描かれており、見る者がきわめて主観的把握をしやすいためであると考えられる。現場に立脚し、事態を俯瞰的にとらえにくい状況では、客観的把握を好む中国語母語話者であっても客観的把握をしにくくなることがわかる。

上で述べたように、設問 1 における話し手は、道順を説明しているという点で、主観的把握をしやすい状況にある。にもかかわらず、中国語母語話者の実に 3 分の 1 以上が「3 つ目」と回答しているという事実から、中国語の客観的把握に対する傾斜を見て取ることができる。「3 つ目」と回答した日本語母語話者がわずか 1 名であることから、日本語と中国語で、地図上における曲がり角の数え方にはっきりとした差があることは明らかであり、「3 つ目」と回答した中国語母語話者が 33 人もいるという事実は、単なる個人差という観点から処理できるものではない。日本語と中国語における曲がり角の数え方の傾向差には、両言語で好まれる事態把握の違いが反映されていると考えるのが妥当である。

［問い 2］に対する答えは、次のようにまとめることができる。

［答え 2］ A 地点に立脚した際に見える風景を描いた設問 2 の図が、きわめて主観的把握をしやすいものであるため、客観的把握を好む中国語母語話者でも、主観的把握をする人が増えた。その結果、客観的把握に基づいて「3 つ目」と数える人が設問 1 よりも減少した。

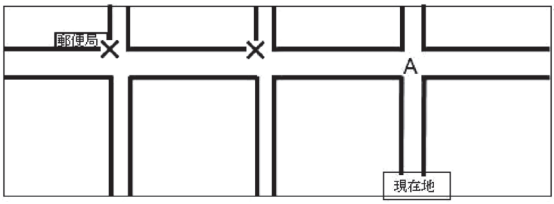
本節における考察は、次のようにまとめられる。図 1 で A 地点をカウントする人が日本語母語話者よりも中国語母語話者に多く存在するのは、中国語母語話者は日本語母語話者よりも広い視野から事態をとらえる傾向にあり、A 地点が視野に入りやすいためである。こうした差異の背景には、日本語母語話者が現場に立脚した近視眼的、局所的な視野から事態を主観的に把握することを好むのに対し、中国語母語話者は巨視的、俯瞰的な視野から事態を客観的に把握することを好むという違いが存在する。日本語母語話者よりも曲がり角を 1 つ多く数える人が中国語母語話者に少なからず存在するのは、両言語で好まれる事態把握の類型が異なることに起因する[4)]。

5. おわりに

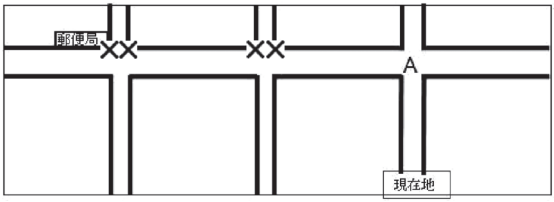
本稿は、同一の地図を用いて道順を説明する際に、日中両言語で曲がり角の数え方に傾向差がある理由およびそれと関連する問題について、両言語で好まれる事態把握の違いという観点から考察をおこなった。中国語母語話者は、日本語母語話者に比べて、地図上で最初の曲がり角（A 地点）をカウントする人が多く存在する。これは、中国語母語話者は日本語母語話者よりも広い視野から事態をとらえる傾向にあり、最初の曲がり角が比較的視野に入りやすいためである。こうした差異が存在する原因は、日本語母語話者が現場に立脚した近視眼的、局所的な視野から事態を主観的に把握することを好むのに対し、中国語母語話者は巨視的、俯瞰的な視野から事態を客観的に把握することを好むという違いに求められる。日本語母語話者よりも曲がり角を 1 つ多く数える人が中国語母語話者に多く存在する現象については、両言語で好まれる事態把握の違いという観点から説明を与えることができる[5)]。

注

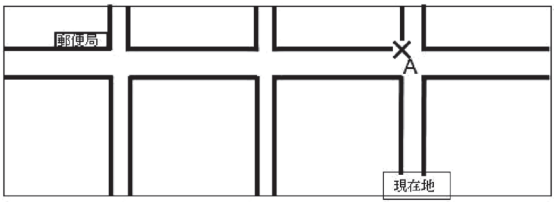
1)「2 つ目」と回答した日本語母語話者の中には、曲がり角ではなく、以下の図で×印をつけた区画の角を数えた人もいると予想される。



2)「4 つ目」と回答した日本語母語話者は、以下の図で×印を付けた区画の角を数えたと考えられる。

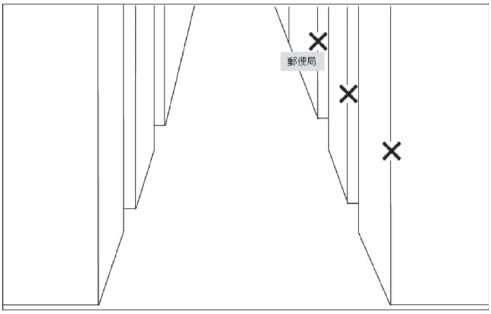


「4 つ目」と回答した日本語母語話者は、次の図の×印をつけた区画の角を数えていないという点で、「3 つ目」と数える回答者よりも「2 つ目」と数える回答者に近いとらえ方をしているといえる。



3）便宜上、設問 1 の図を使って説明すると、「4 つ目」と回答した日本語母語話者は、注 2 の最初の図で×印をつけた区画の角を数えたと考えられる。「5 つ目」と回答した人は、注 2 の 2 つの図で×印をつけた区画の角をあわせて数えたと考えられる。「4 つ目」と回答した人は、注 2 の 2 つ目の図で×印をつけた区画の角を数えていないという点で、「3 つ目」と数える回答者よりも「2 つ目」と数える回答者に近いとらえ方をしているといえる。「5 つ目」と回答した人は、同図で×印をつけた区画の角を数えているという点で、「2 つ目」と数える回答者よりも「3 つ目」と数える回答者に近いとらえ方をしているといえる。

4）表 2 に示したように、設問 2 で「3 つ目」と回答した日本語母語話者は 24 人、中国語母語話者は 14 人である。日本語母語話者は主観的把握を好み、中国語母語話者は客観的把握を好むとされることから、「3 つ目」と回答する人は、中国語母語話者の方が多いと予想されたが、実際には日本語母語話者の方が多く存在した。本稿は「3 つ目」と回答した日本語母語話者には、A 地点を含む曲がり角を数えた人と以下の図で×印をつけた区画の角を数えた人がいたと考える。



日本語の「角」は曲がり角（道の曲がっている箇所）と区画の角の両方を指せるが、中国語の“拐角处”は曲がり角を指す語であり、区画の角を指すことはできない。設問 2 で「3 つ目」と回答した日本語母語話者が中国語母語話者よりも多いという事実は、日本語では曲がり角に加えて区画の角を数える可能性があるが、中国語では区画を数える可能性がないという違いに起因するものであると考える。本調査では、回答者が図のどの部分を数えたのかという点については回答を求めなかったため、今後、さらに調査する必要がある。

5）設問Ⅰにおける台詞部分は「私たちは、今、「現在地」にいます。……」、設問Ⅱにおける図の説明部分は「あなたは、今、上記の地図の……」となっており、主語として用いられる代名詞が異なる。これらの代名詞自体に発話者の視点が示されているため、主語代名詞の違いが調査結果に影響を与えたという見方もあるかもしれないが、本稿はそのようには考えない。設問Ⅰ、Ⅱにおける図の説明部分では、主語が「あなた」で統一されている。台詞部分では、前者の主語が「私たち」であり、後者には主語代名詞が存在しないという違いがあるが、いずれも、話し手と聞き手の現場立脚場面が想定されていることは明らかである。2 つの設問の台詞部分はこの点で共通しているため、両設問における主語代名詞の違いが調査結果に影響を与えたとは考えない。日本語母語話者である筆者の感覚では、仮に設問Ⅰの台詞部分の主語を「あなた」に変えたとしても、調査結果は基本的に変わらないと思われる。このほか、査読者よりアンケートに厳密性が足りない、データが根拠として薄弱であるとの指摘を受けた。この点については、反省点として受け止め、今後の課題としたい。

参考文献

池上嘉彦 1999.「日本語らしさの中の〈主観性〉―日本語の文の主観性をめぐって・その 1」,『言語』28（1），pp.84-94。

池上嘉彦 2000.『「日本語論」への招待』，講談社。

池上嘉彦 2008.「日本語話者における〈好まれる言い回し〉としての〈主観的把握〉」,『日本语言文化研究』8，pp.1-6。

池上嘉彦 2009.「認知言語学における〈事態把握〉―〈話す主体〉の復権」,『言語』38（10），pp.62-70。

木村英樹 1996.『中国語はじめの一歩』，筑摩書房。

木村英樹 2014.「こと・こころ・ことば―現実をことばにする「視点」」,『人文知 1　心と言葉の迷宮』，pp.97-118。東京大学出版会。

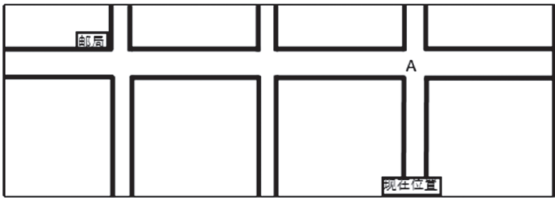
守屋三千代・徐愛紅 2012.「〈事態把握〉と語順をめぐる日中対照研究―それぞれの話者は事態のどこから言語化するか」,『汉日语言对比研究论丛』3，pp.196-205。

李奇楠 2016.「中国語・日本語の構文から見る主観性」,『言語の主観性　認知とポライトネスの接点』，pp.1-17。くろしお出版。

佐々木勲人 2013.「ヴォイス構文と主観性―話者の言語化をめぐって―」,『木村英樹教授還暦記念　中国語文法論叢』，pp.315-331。白帝社。

付録　中国語母語話者用アンケート用紙

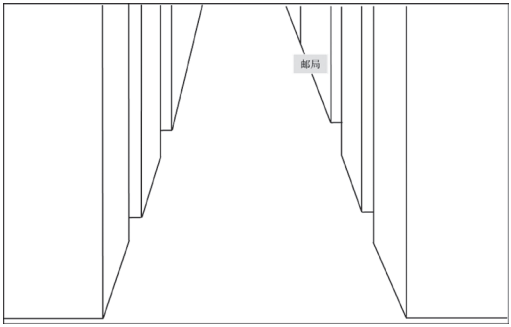
Ⅰ．假设有人向您问路，您拿着以下地图在告诉他邮局的位置。请将合适的数字填写在［说明文 1］中的括号内。



［说明文 1］

我们现在在这个“现在位置”。沿着眼前这条路直走，到第一个拐角处左拐。在第（　）个拐角处就是邮局了。

Ⅱ．假设您现在在上图所示的 A 这个地点，朝着邮局的方向，面前呈现的便是以下这样的场景。这种情况下您如何说明邮局的位置，请将合适的数字填写在［说明文 2］中的括号内。



［说明文 2］

你看，那边第（　）个拐角那个建筑物就是邮局。

付記

本稿の執筆にあたり、有益なご助言をくださった査読者の先生およびアンケート調査にご協力くださったすべての方に心より感謝申し上げます。

本稿の着想は、筆者が中国の大学で担当した日本語会話の授業で、約四分の一の学生が地図を用いた道順の説明に際して、筆者の感覚より曲がり角を一つ多く数えたことから得たものである。執筆を終えた現在では、中国語では“拐”という動詞から想起される動作が人によって若干の違いがあり、それが曲がり角の数え方の違いに影響を与えている可能性についても考慮しなければならないと考えている。